

寒風山の草原性鳥類

Glassland bird of Mt.Kanpu in Akita prefecture

高橋 一郎*

Ichiro TAKAHASHI

はじめに

秋田県における草原性鳥類については、男鹿半島全域で実施した小笠原ほか(1973)の一部、八郎潟干拓地において珍鳥オオセッカの生態をまとめた西出(1975)、男鹿半島西端入道崎の鳥類をまとめた佐藤(1976)、八郎潟干拓地内湿地草原の鳥類をまとめた岸(1985)などの諸報告がある。

筆者は、秋田県立博物館の研究および展示活動のひとつである自然史シリーズ、前回の「八郎潟」につづく「男鹿」(対象地名)の一環として、男鹿半島の草原性鳥類に焦点をあてた。男鹿半島には、風衝作用および刈り込み作用、踏み込み作用により草原化した入道崎や寒風山などがある。今回は、山地草原である寒風山に絞り、そこの鳥類を調査した結果、鳥類相およびホオジロ、ホオアカなどの草原性鳥類について興味ある知見を得たので報告する。

この報告を草するにあたり、懇切丁寧に校閲してくださいました秋田大学教育学部教授 小笠原暁博士に対し、深甚な謝意を表します。

調査地の概要

図1の位置図に示すように、男鹿半島は、秋田県中央部から日本海に突出するように形成されており、その基部には八郎潟がある。半島東側に位置する寒風山(354.8m)は、第4紀に噴火したといわれる比較的新しい火山である。宮脇ほか(1973)によれば、旧火口部およびその周辺は、火山岩礫地植生としての低木を主としたマント群落とし、この火口部を除いた山塊部は、人為的な影響も加わったススキやシバを主にした山地草原としている。現在、森林はほとんど形成されておらず、なだらかで壮大な開放景観を示す。

調査は、図1に示すように、寒風山西側の火口原(A地域)と寒風山北側中腹丘陵地(B地域)の2か所で実施した。A地域は、経の町火口原(旧池ノ平噴火口)と称する窪地状の草地であり、ススキやシバ類、シダ類が優占する。また、面積的には小さいが、寒風山西側斜面と姫岳北側の斜面には、火山岩礫地低木群落が形成され、その林縁には、ササ類、ヤマハギなどが生育している。B地域は、標高100m—180mの中腹丘陵地で、近年ゴルフ場として開放された。その周辺部には、カスミザクラ、ガマズミ、タニウツギ、ヤマハギなどの木本類、オオイタドリ、ススキなどの丈高草本類、クズ、ノイバラなどのつる性植物が繁茂している。また、所々にヨシ湿原地やスギ植林地が認められる。調査地内における人の往来は、A地域の幹線道路際やB地域のゴルフ場周辺に限られており、地内を出入りする人の数は少ない。

調査方法

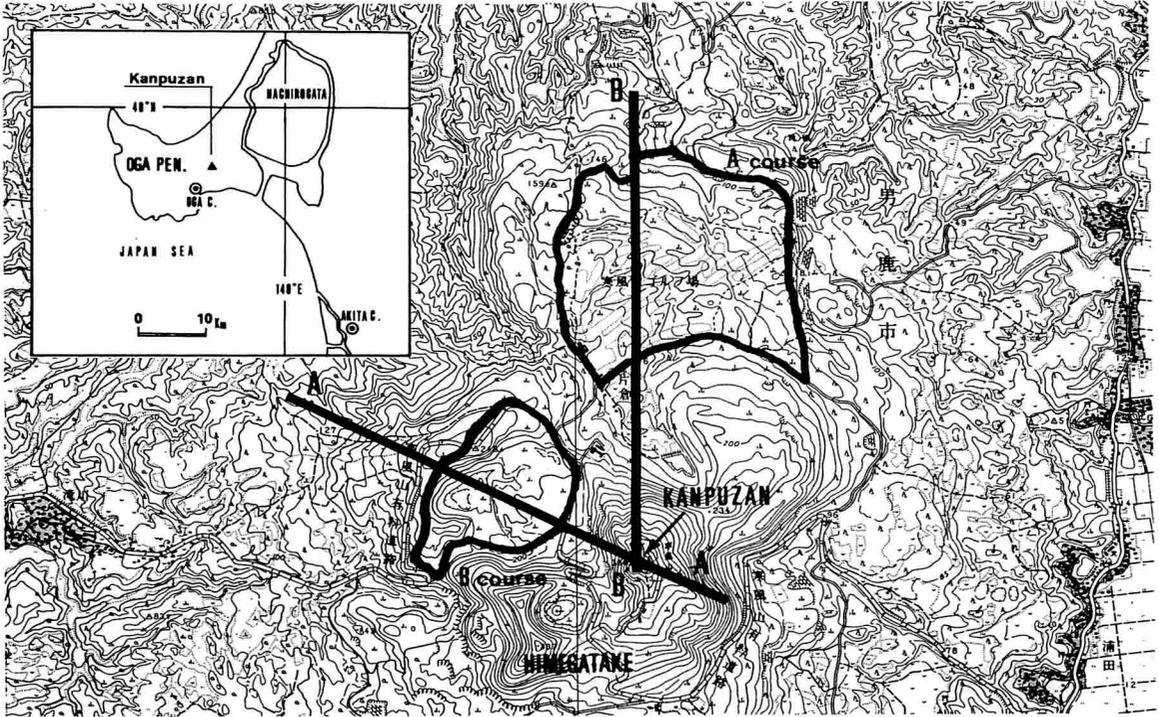
図1に示すように、調査は、A、B地域共、巡回コースをとった。Aコースは、一周3.0km、Bコースは、4.8kmである。毎月1回、1988年4月から11月までの9か月間、コースにしたがい約50m巾に出現するすべての鳥類を記録するラインセンサス法により実施した。

結果と考察

1. 鳥類相の概要

A地域とB地域に出現する鳥類を把握すれば、寒風山の鳥類のほとんどが網羅できると考えられる。寒風山で認められる鳥類は、表1に示すように、22科48種である。調査期間中毎月のように観察され、通年生息していると思われる鳥類は、トビ、ヒヨドリ、モズ、

* 旧職員、現秋田市立土崎中学校教諭



国土地理院発行 2万5千分の1地形図「北浦」「寒風山」を使用

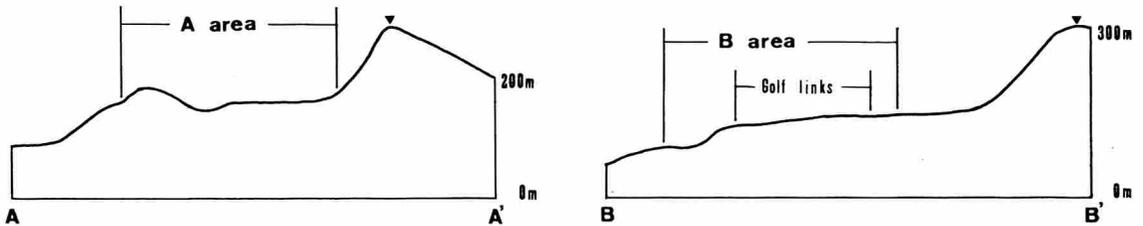


図1 調査地付近の概要図

Fig. 1 Showing the map of the investigated area.

ホオジロ、カワラヒワの5種と少ない。ヒバリとウグイスは、当地における滞在期間は長いものの、11月以後早春までは生息しないと思われる。図2に示すように、月別の優占種を比較すれば、繁殖期である4~8月は、ホオジロ、ヒバリ、ウグイス、ホオアカ、ヒヨドリによって占められ、9月以降の秋期は、渡りの途中と思われるツグミ、メジロ、マヒワ、ツバメに加えて、繁殖後集団となったホオジロ、ムクドリ、ヒヨドリなどが数を増している。

2. 繁殖期における優占種の変化

4~8月を当地における繁殖期としたとき、この期間で優占する種類は、図3の上図に示した、ウグイス(20.0%)、ホオジロ(18.8%)、ホオアカ(11.8%)、ヒヨドリ(11.3%)、カワラヒワ(5.4%)、ヒバリ(5.3%)である。これらの6種について、A、B地域別に優占度で比較したのが図3の中・下図であり、単位時間あたりの出現個体数の月別変化で比較したのが図4である。

最優占種であるウグイスは、低木林内を生息域にし

表1 寒風山の鳥類目録

Tab. 1 A list of birds observed on Mt. Kanpu.

Family ANATIDAE	22. <i>Turdus cardis</i> クロツグミ
1. <i>Anas poecilorhyncha</i> カルガモ	23. <i>T. naumanni</i> ツグミ
F. ACCIPITRIDAE	24. <i>Cettia diphone</i> ウグイス
2. <i>Milvus migrans</i> トビ	25. <i>Acrocephalus arundinaceus</i> オオヨシキリ
F. FALCONIDAE	26. <i>Cyanoptila cyanomelana</i> オオルリ
3. <i>Falco peregrinus</i> ハヤブサ	27. <i>Muscicapa latirostris</i> コサメビタキ
4. <i>F. tinnunculus</i> チョウゲンボウ	F. AEGITHALIDAE
F. PHASIANIDAE	28. <i>Aegithalos caudatus</i> エナガ
5. <i>Phasianus colchicus</i> キジ	F. PARIDAE
F. SCOLOPACIDAE	29. <i>Parus ater</i> ヒガラ
6. <i>Gallinago hardwickii</i> オオジシギ	30. <i>P. varius</i> ヤマガラ
F. COLUMBIDAE	31. <i>P. major</i> シジュウカラ
7. <i>Streptopelia orientalis</i> キジバト	F. ZOSTEROPIDAE
F. CUCULIDAE	32. <i>Zosterops japonica</i> メジロ
8. <i>Cuculus canorus</i> カッコウ	F. EMBERIZIDAE
9. <i>C. poliocephalus</i> ホトトギス	33. <i>Emberiza cioides</i> ホオジロ
F. PICIDAE	34. <i>E. fucata</i> ホオアカ
10. <i>Dendrocopos major</i> アカゲラ	35. <i>E. rustica</i> カシラダカ
11. <i>D. kizuki</i> コゲラ	36. <i>E. elegans</i> ミヤマホオジロ
F. ALAUDIDAE	37. <i>E. spodocephala</i> アオジ
12. <i>Alauda arvensis</i> ヒバリ	F. FRINGILLIDAE
F. HIRUNDINIDAE	38. <i>Carduelis sinica</i> カワラヒワ
13. <i>Hirundo rustica</i> ツバメ	39. <i>C. spinus</i> マヒワ
F. MOTACILLIDAE	40. <i>Uragus sibiricus</i> ベニマシコ
14. <i>Motacilla cinerea</i> キセキレイ	41. <i>Pyrrhula pyrrhula</i> ウソ
15. <i>M. alba</i> ハクセキレイ	42. <i>Eophona personata</i> イカル
F. PYCNONOTIDAE	F. PLOCEIDAE
16. <i>Hypsipetes amaurotis</i> ヒヨドリ	43. <i>Passer montanus</i> スズメ
F. LANIIDAE	F. STURNIDAE
17. <i>Lanius tigrinus</i> チゴモズ	44. <i>Sturnus philippensis</i> コムクドリ
18. <i>L. bucephalus</i> モズ	45. <i>S. cineraceus</i> ムクドリ
F. MUSCICAPIDAE	F. CORVIDAE
19. <i>Phoenicurus auroreus</i> ジョウビタキ	46. <i>Garrulus glandarius</i> カケス
20. <i>Saxicola torquata</i> ノビタキ	47. <i>Corvus corone</i> ハシボソガラス
21. <i>Monticola solitarius</i> イソヒヨドリ	48. <i>C. macrorhynchos</i> ハシブトガラス

ていることから、A地域に比べ、低木林の占める割合が多いB地域に優占している。優占度は、A地域の15.0%に対しB地域が23.0%である。しかしながらA地域の寒風山西側斜面および姫岳北側斜面の低木林は、面積的にはわずかであり、15.0%は、決して少ない値ではない。図4の月別変化においても、A地域での値がやや低いながらも、A、B地域は類似した変化をみせている。A地域の低木林の様子を見直してみれば、林縁にササが広範に分布しており、これは、テリトリの分布とササの分布とが密接な関係にあるとする羽田・岡部(1970)の見解に合致するように思える。

草原性鳥類を代表するホオジロ属は、当地においてもホオジロ、ホオアカ、カシラダカ、ミヤマホオジロ、アオジの5種が観察されたが、繁殖期に常時認められ

たのは、ホオジロとホオアカの2種である。両種は、近似種であり、生息環境も類似していることから、その分布状況は興味あるところであった。調査の結果、両種は明らかに生息地域を異にする状況にあり、ホオジロは、主に低木林内および林縁群落内で、ホオアカは、ススキなどの丈高植物やその周辺で観察された。優占度からみれば、ホオジロは、A地域9.3%、B地域24.3%であり、ホオアカは、A地域27.5%、B地域2.6%である。図4に示す相対密度の月別変化をみると、4月、ホオジロはA地域2.3N/h、B地域7.0N/h、計9.3N/hであるのに対し、ホオアカはまだ出現していない。ホオアカの繁殖活動は、ホオジロに比べ1か月以上遅い5月下旬から始まっている。これは、長野県におけるホオジロ(山岸1978)、ホオアカ(牛山1968)

表2 調査結果

Tab. 2
Census results

No. 種名		調査年月日		1988. 4. 14			1988. 5. 25			1988. 6. 17			1988. 7. 19		
		調査地域		A	B	T.									
		調査時間		1.3h	2.0h	3.3h	1.5h	2.1h	3.6h	1.5h	2.5h	4.0h	1.5h	2.5h	4.0h
出現個体数		N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	
01	<i>Anas poecilorhyncha</i> カルガモ					4		4							
02	<i>Milvus migrans</i> トビ		2	2	3	1	4	2	2	4	3			3	
03	<i>Falco peregrinus</i> ハヤブサ														
04	<i>F. tinnunculus</i> チョウゲンボウ								1	1					
05	<i>Phasianus colchicus</i> キジ														
06	<i>Gallinago hardwickii</i> オオジシギ				2		2								
07	<i>Streptopelia orientalis</i> キジバト								1	1	1	8	9		
08	<i>Cuculus canorus</i> カッコウ				2	7	9	1	1	2	1	1	2		
09	<i>C. poliocephalus</i> ホトトギス					5	5	2	3	5	1	4	5		
10	<i>Dendrocopos major</i> アカゲラ						1	1		1	1				
11	<i>D. kizuki</i> コゲラ														
12	<i>Alauda arvensis</i> ヒバリ	12		12	13		13	13		13	4		4		
13	<i>Hirundo rustica</i> ツバメ										6	5	11		
14	<i>Motacilla cinerea</i> キセキレイ											3	3		
15	<i>M. alba</i> ハクセキレイ	1		1						1	1				
16	<i>Hypsipetes amaurotis</i> ヒヨドリ				1	9	10	3	27	30	13	17	30		
17	<i>Lanius tigrinus</i> チゴモズ											1	1		
18	<i>L. bucephalus</i> モズ		1	1	1	1	2	1	2	3		1	1		
19	<i>Phoenicurus auroreus</i> ジョウビタキ		1	1											
20	<i>Saxicola torquata</i> ノビタキ				1		1								
21	<i>Monticola solitarius</i> イソヒヨドリ								2	2					
22	<i>Turdus cardis</i> クロツグミ					1	1	2	2			1	1		
23	<i>T. naumanni</i> ツグミ				1	1	1	1	1						
24	<i>Cethia diphone</i> ウグイス	5	4	9	9	28	37	16	42	58	15	32	47		
25	<i>Acrocephalus arundinaceus</i> オオヨシキリ					4	4		3	3		2	2		
26	<i>Cyanoptila cyanomelana</i> オオルリ					2	2								
27	<i>Muscicapa latirostris</i> コサメビタキ														
28	<i>Aegithalos caudatus</i> エナガ											7	7		
29	<i>Parus ater</i> ヒガラ														
30	<i>P. varius</i> ヤマガラ						1	1							
31	<i>P. major</i> シジュウカラ		1	1											
32	<i>Zosterops japonica</i> メジロ														
33	<i>Emberiza cioides</i> ホオジロ	3	14	17	5	17	22	16	17	33	5	43	48		
34	<i>E. fucata</i> ホオアカ				2	1	3	24	8	32	36	5	41		
35	<i>E. rustica</i> カシラダカ														
36	<i>E. elegans</i> ミヤマホオジロ														
37	<i>E. spodocephala</i> アオジ		1	1					1	1					
38	<i>Carduelis sinica</i> カワラヒワ	1	7	8	6	2	8	6	16	22	4	3	7		
39	<i>C. spinus</i> マヒワ														
40	<i>Uragus sibiricus</i> ヘナマシコ														
41	<i>Pyrrhula pyrrhula</i> ウソ														
42	<i>Eophona personata</i> イカル								2	2					
43	<i>Passer montanus</i> スズメ							2	3	5		9	9		
44	<i>Sturnus philippensis</i> コムクドリ								12	12					
45	<i>S. cineraceus</i> ムクドリ											6	6		
46	<i>Garrulus glandarius</i> カケス					1	1		2	2	1		1		
47	<i>Corvus corone</i> ハシボソガラス	3		3	5		5	1	4	5	2	11	13		
48	<i>C. macrorhynchos</i> ハシブトガラス							1		1	3	11	14		
T		25	31	56	55	81	136	88	154	242	95	170	265		

寒風山の草原性鳥類

1988.8.31			1988.9.14			1988.10.20			1988.11.30			Total		
A	B	T.	A	B	T.	A	B	T.	A	B	T.	A	B	T.
1.5h	2.5h	4.0h	1.5h	3.0h	4.5h	1.3h	3.0h	4.3h	1.0h	2.5h	3.5h	11.2h	20.2h	31.4h
N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N
												4		4
3	8	11	6	1	7	3	5	8	1	1	2	21	20	41
1		1										1		1
													1	1
							1	1					1	1
	1	1										2	1	3
1		1		1	1							2	10	12
												4	9	13
												3	12	15
													2	2
							1	1					1	1
3		3	2		2	5		5				52		52
5	1	6	65		65							76	6	82
													3	3
			1	1	2							2	2	4
7	19	26	3	14	17	39	6	45		3	3	66	95	161
													1	1
3	1	4	1	2	3	1		1				7	8	15
													1	1
												1		1
													2	2
	1	1											5	5
	1	1				300	137	437				301	139	440
2	17	19	2	13	15	8	49	57		1	1	57	186	243
													9	9
													2	2
				5	5								5	5
								9	9				16	16
													8	8
										8	8		8	8
										1	1		3	3
			4	5	9	5	26	31	1	17	18	10	49	59
							128	128					128	128
	39	39	6	33	39	2	37	39		3	3	37	203	240
24		24	9		9	9		9				104	14	118
													2	2
										8	8		8	8
								8	8				10	10
	1	1				7	4	11		2	2	24	35	59
						43	6	49		9	9	43	15	58
								1	1				1	1
										1	1		1	1
	7	7											9	9
1	2	3	1		1		7	7		17	17	4	38	42
													12	12
			17	1	18	3		3				20	7	27
	1	1										1	4	5
			2		2	2		2				15	15	30
						2		2		3	3	6	14	20
50	99	149	119	76	195	429	428	857	2	74	76	863	1113	1976

Apr.	ホオジロ 30.4%	ヒバリ 21.4%	ウグイス 16.1%	カワラ ヒワ 14.3%	他	
May	ウグイス 27.2%	ホオジロ 16.2%	ヒバリ 9.6%	他		
Jun.	ウグイス 24.0%	ホオジロ 13.6%	ホオアカ 13.2%	ヒヨドリ 12.4%	カワ ラ ヒ ワ 9.1%	他
Jul.	ホオジロ 18.1%	ウグイス 17.7%	ホオアカ 15.5%	ヒヨドリ 11.3%	他	
Aug.	ホオジロ 26.2%	ヒヨドリ 17.4%	ホオアカ 16.1%	ウグイス 12.8%	他	
Sep.	ツバメ 33.3%	ホオジロ 20.0%	他			
Oct.	ツグミ 51.0%		メジロ 14.9%	他		
Nov.	メジロ 23.7%	スズメ 22.4%	マヒワ 11.8%	ヒガラ 10.5%	ミヤマホオジロ 10.5%	他

図2 月別優占種の変化

Fig. 2 Monthly changes of the relative number in the dominant species.

の例に類似する。しかし、渡来が遅いホオアカは、6月になると、A地域を主な生息地としながら、ホオジロの生息数をしのぐ状況となる。これは、7・8月も同様である。ホオジロとホオアカの生息分布の異なりが、種間競争によるものなのか、生息環境によるものなのか、あるいは行動圏の違いによるものなのかははっきりしないが、A地域とB地域とでは、明らかな相違が認められ、今後の研究課題となろう。

ヒヨドリは、スギ、マツ類のほか、比較的樹高の高い広葉樹林の、しかも高い位置で観察されることが多い。A地域での優占度7.7%は、ほとんどが上空を通過した個体であることから、その数値で地域に優占するとはいいがたい。B地域で示す13.5%こそが、地域の特徴を示すものである。図4の相対密度の月別変化からみても、繁殖期におけるB地域の最大値が6月の10.8 N/hであるのに対し、A地域の最大値が7月の8.7 N/hである。これは、早期に繁殖を終了した個体が採餌目的によりA地域に移動、もしくはA地域を通過したとみるほうが自然であろう。10月のA地域における相対密度30.0%がそれを裏付けていると考える。

カワラヒワは、市街地ではスギやマツ類などを営巣木に利用することで知られているが、当地では、もっと樹高の低い木本類を利用することも考えられる。また、採餌のために常時草原内に飛来していることから、生息域は、寒風山全域にわたっていると考え。A、カワラヒワ

Whole area (A + B)	ウグイス 20.0%	ホオジロ 18.8%	ホオアカ 11.8%	ヒヨドリ 11.3%	カワ ラ ヒ ワ 5.4 %	ヒバリ 5.3 %	他
A area							
B area							

図3 繁殖期における優占種の地域別変化

Fig. 3 Change of the dominant species in the breeding season at each investigated area.

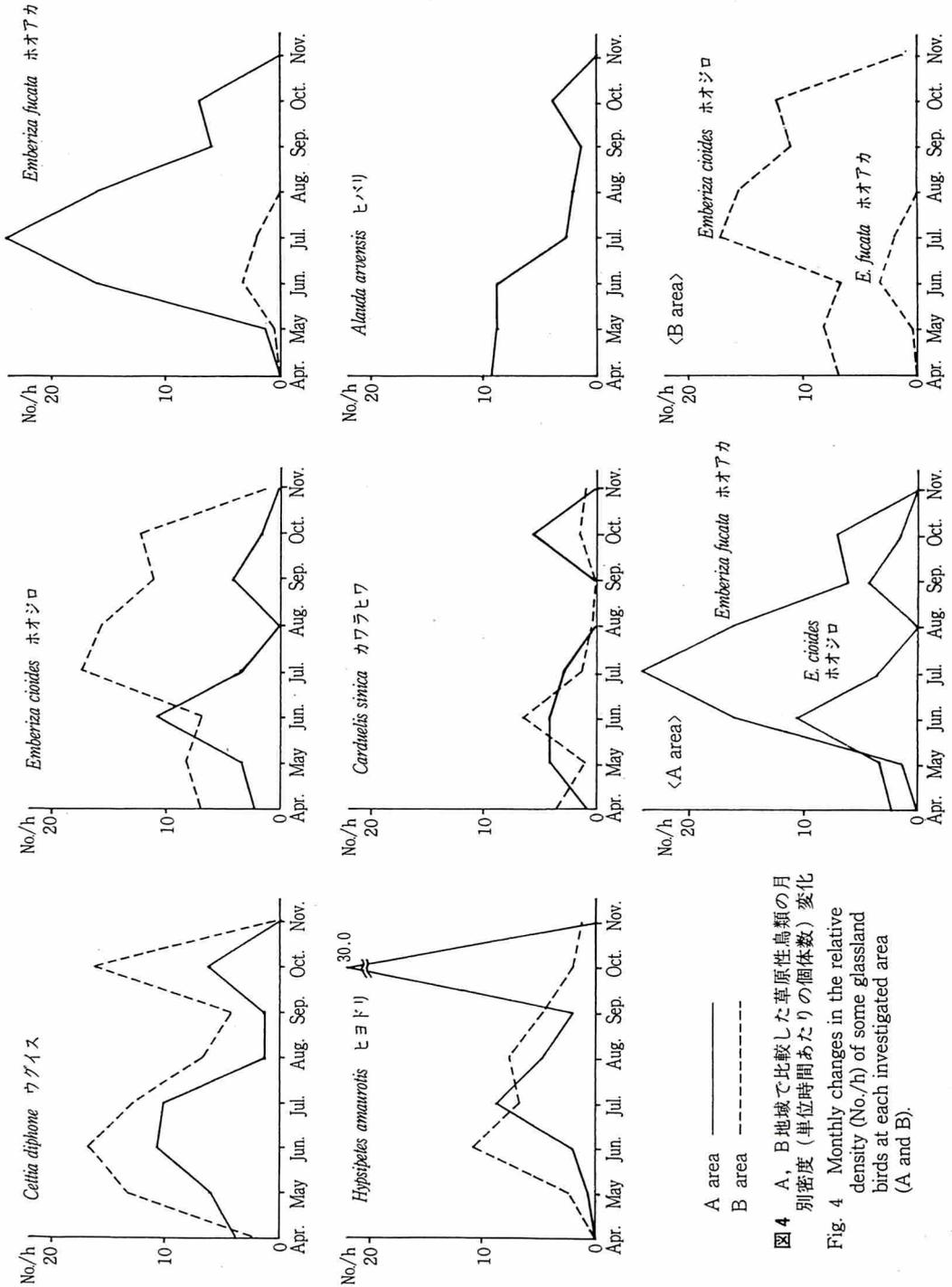


図4 A, B地域で比較した草原性鳥類の月別密度(単位時間あたりの個体数)変化
 Fig. 4 Monthly changes in the relative density (No./h) of some grassland birds at each investigated area (A and B).

B地域の優占度を比較しても5.4%と近似しているし、月別変化もほぼ類似した形を示す。

ヒバリは、B地域ではまったく認められず、すべてA地域において観察された。しかも、生息域は、強く刈り込まれた草地内であり、同じA地域を主生息地とするホオアカとは、明らかに異なっている。

以上、繁殖期における6種について、その生態を述べたが、それぞれに特徴ある生息分布があるように思われる。草原性鳥類の群集構造について論じた中村(1963)やホオジロ属の生活場所と行動圏を論じた中村ほか(1968)とは、構成種に若干のちがいがあり、同一に論じられることではない。しかし、当地における草原性鳥類、特にホオジロとホオアカについては、繁殖分布や生態行動に興味ある相違が認められ、再調査後、別の機会に報告したい。

要 約

1. 寒風山における鳥類調査は、1988年4月から1988年11月までの期間、毎月1回、ラインセンサス法により実施した。なお、調査は、ススキやシバ類が優占するA地域と丈高植物や低木林などによって占められるB地域とに分けて行った。
2. 出現した鳥類は、表1に示すように、22科48種である。
3. 繁殖期である4～8月に優占する種類は、ウグイス(20.0%)、ホオジロ(18.8%)、ホオアカ(11.8%)、ヒヨドリ(11.3%)、カワラヒワ(5.4%) およびヒバリ(5.3%) である。
4. 繁殖期において、ホオアカ、ヒバリはA地域に、ホオジロ、ヒヨドリはB地域に優占する。また、ウグイスはややB地域に多く、カワラヒワは、A、B

地域の差はない。

5. 繁殖期に優占する6種は、繁殖環境を異にしているように思われる。

引用文献

- 羽田健三・岡部剛士，1970：ウグイスの生活史に関する研究。山階鳥研報，6：131-140。
- 岸 通，1985：大瀧村A40地区の野鳥。秋田の野鳥，11：5-6。秋田県野鳥の会。
- 宮脇 昭・奥田重俊・佐々木寧・井上香世子・原田洋・鈴木邦雄・藤原一絵・大野啓一，1973：男鹿半島の植生。日本自然保護協会調査報告，44：101-145。
- 中村登流，1963：繁殖期における山地草原性鳥類の群集構造について。山階鳥研報，3：334-357。
- 中村登流・山岸 哲・飯島一良・香川敏明，1968：泥炭地草原におけるホオジロ属の生活場所と行動圏の比較調査。山階鳥研報，5：313-336。
- 西出 隆，1975：八郎瀧干拓地におけるオオセッカの生態 1. 干拓地内の分布と繁殖生態の概要。山階鳥研報，7：681-696。
- 小笠原嵩・高橋一郎・泉 祐一，1973：男鹿半島鳥類調査報告。日本自然保護協会調査報告，44：56-79。
- 佐藤磯男，1976：男鹿半島入道崎地域の鳥類。秋田県鳥類分布調査(5) (昭和50年度)，21-24。秋田県環境保健部自然保護課。
- 牛山英彦，1968：繁殖期のホオアカ *Emberiza fucata* の行動圏とテリトリー。日生態第15回大会講演集，5-6。
- 山岸 哲，1970：ホオジロの繁殖期の生活について。山階鳥研報，6：103-130。